



1947年（昭和22年）カスリーン台風の体験談

台風の概要

1947年（昭和22年）9月8日未明、マリアナ諸島東方で発生した弱い熱帯低気圧が徐々に勢力を増しながら北上。12日朝には硫黄島西方500kmの海上に達し、進路を北に向けました。このときの中心気圧は960mb（960hpa）、中心付近の最大風速は秒速45m、暴風半径は200kmと推定され、非常に強い台風になりました。

台風は9月14日未明には鳥島の南西400kmの海上まで北上。15日20時頃には房総半島の南端をかすめますが、この頃になると勢力が弱まり、中心付近の最大風速は20m程度になり、16日には三陸沖に去っていきました。

当時、日本はアメリカ軍を主とする連合軍の占領下にあったため、日本列島を襲う台風の名前は連合軍が決めていました。名前は、台風が発生する度、アルファベットのA、B、C順に女性の名前を冠しました。日本ではキティ台風（昭和24年）、ジェーン台風（昭和25年）などが有名です。カスリーン台風の英名は「KATHLEEN」。KなのでAから数えて11番目ですが、なかには日本が台風と見なさなかったものがあったため、実際は9番目だったと言われています。

台風そのものは本州に近づいた時、既に勢力を弱めつつあり、進路も関東地方の太平洋岸をかすめただけだったので、強風による被害はあまり出ませんでした。しかし、台風の接近に先立って、日本列島付近には秋雨前線が停滞しており、そこに台風の湿った空気が入り込んだため前線が活発化。これにより豪雨もたらされたと考えられています。

この台風の特徴は、あらかじめ秋雨前線によって雨が降っていたところに台風による雨が加わり、利根川流域及び荒川流域の広い範囲にわたって大量の降雨をもたらした点です。カスリーン台風は風速が弱く、雨量が異常に多いという、典型的な「雨台風」だったのです。

9月13日、台風の接近に伴い、荒川流域の各地では激しい雨が降り始めました。この雨は房総半島をかすめていった15日夜半まで降り続けました。荒川流域の秩父観測所においては13日11時20分～15日20時40分に611mmという降雨量を記録。これは年間降水量の4分の1がわずか1日半で降ったことになります。

利根川流域も豪雨となり、3日間の降雨量は、利根川（湯原）、渡良瀬川（足尾）で380mmといずれも300mm以上を記録しました。特に、鳥川（三ノ倉）、鬼怒川（黒部）では400mm

以上を記録しました。

カスリーン台風が南太平洋で発生した9月8日頃、日本列島は秋雨前線が停滞していたため、2～3日間、雨が降り続いていました。そこへ北上したカスリーン台風による豪雨により、各河川ともに急速に水位が上がりました。

利根川本川では、全川にわたって計画高水位を上回り、小山水位観測所（107km）より上流では既往最高水位を記録。利根川の決壊口に近い栗橋地点の水位は16日0時20分には最高9.17mに達しました。埼玉県東村（現・加須市）の新川通地先付近では河川水位が堤防より0.5m高くなり、延長350mにわたって堤防が決壊しました。

また、江戸川では東金野井より上流で計画高水位を上回り、渡良瀬川でも全川で計画高水位を超え、その他の支川についても部分的に計画高水位を上回りました。

荒川流域においては、現在の鴻巣市で堤防が約65mに渡り決壊したのに続き、熊谷市久下地先でも約100mにわたり堤防が決壊しました。荒川から溢れ出た濁流は中小河川を次々と堤防決壊に追いやりながら元荒川沿いに南下し、17日には利根川の堤防決壊による濁流と合流して、ついに東京都と埼玉県の境に位置する大場川の桜提をも破り、葛飾区、江戸川区に浸水範囲を広げていきました。最初の堤防決壊から5日目を数える20日午後には、多くの市区町村を飲み込んだ濁流は東京湾にまで達しました。

体験談

当時のお住まい（茨城県猿島郡中川村〈現：坂東市〉） Aさん

当時は13歳で中学1年生でした。利根川が決壊した日は何日も前から雨が続き、暗い中、父が持っていた舟を利根川から高台にある家の裏のあたりまで持っていきました。その後、「ドスン」と音がして堤防が崩れてきました。水の流れる「ゴーゴー」という音がいまだに頭に残っています。うちは高い場所にあるから被害はありませんでしたけど、土手の下に住んでいる親戚が避難してきて、母が炊き出しでおにぎりを作っていました。

後から聞いた話ですが、近所に私よりも年上の女性がいて、男の子と一緒に逃げていたそうです。でも、「ドスン」と音がして振り返ったら男の子がいないとー。その男の子はいまだに行方不明です。

台風などで川の増水が予想される時など防災ラジオからの情報に気を付けるようにしています。情報はとても大切ですね。

当時のお住まい（栃木県足利郡毛野村〈現：足利市〉） Bさん

被災したのは4歳の時です。洪水が家を襲ったのは夜8時半ごろでした。父に連れられて本堂に逃げ、なおも水が迫るので、屋根を破って天井裏に上がりました。外ではごうごうと濁流

の音がします。「助けてくれー」という声が、時間がたつにつれ消えていきました。母は「助けられずにごめんなさい」と手を合わせていました。

水が引くとご遺体が寺に運ばれてきます。小さな子どもを抱いた母親の姿もありました。暑さの中で腐敗が進み、地獄絵図のような惨状でした。幼心に命の尊さを知り、その後の私の生き方の原点になっています。

20歳代半ばから、亡くなった方々の調査を始め、ご供養も毎年続けています。学校などで体験を語る活動にも取り組んできました。当時を知る人が少なくなってきた今こそ、しっかりと伝え続けなければと思います。

当時のお住まい（栃木県足利郡菱村〈現：群馬県桐生市〉） Cさん

カスリーン台風は9歳の時に体験しました。長男の私は、次男の手を引き、4月に生まれたばかりの3男を背負って高台にある織物工場に向かいました。両親が避難してくるのを待つ間は不安で、時間がとても長く感じられたのを今でも覚えています。

避難所では他の家族と不安な一夜を過ごしました。翌日家に戻ると、自宅脇にあったアカシアの大木や石塔は流されてしまい、あらためて水の力、怖さを目の当たりに感じました。

その経験から、災害時は早めの避難や備えが必要と学びました。日頃から自宅付近の地形や避難場所を確認し、近所の人とも話し合っています。

あの時食べた、炊き出しのおにぎりのおいしさは今でも忘れられません。食料の備蓄はもちろん、電池が要らないエコタイプの懐中電灯なども常に用意しています。

当時のお住まい（埼玉県北埼玉郡原道村〈現：加須市〉） Dさん

当時、私は原道村（現：加須市）で被災しました。1947年（昭和22年）9月16日深夜零時15分頃、土手を越えた濁流が収穫前の稲をザザーッと地響きと共にものすごい音を立てて倒していったのが今でも耳に残っています。真っ暗闇の中、近所18人で近くの高台に逃げましたが、若者は私を入れて3人だけ。年寄りと子どものため流木でやぐらを組み、明け方に一面海のような光景を見て愕然としました。

終戦から2年後の食糧難の時代。土手のバラック（仮設住宅）で砂地をスコップで掘り、溜まった水をすくって飲む、まさに裸一貫の生活。配給は乾パンだけでした。

当時は大水害の経験がなく、ろうそくや懐中電灯の準備もしていない。私たちの経験を通じて日頃の備えが本当に大切だと今の若い方々に理解してもらえたらうれしいです。

当時のお住まい（千葉県東葛飾郡田中村〈現：柏市〉） Eさん

カスリーン台風が接近してきた夜、雨風が非常に強く私は稲木干しをしてあった稲を回収し

終えた後、家に戻りました。しかし、3人がまだ田んぼで稲の回収に取り掛かっている状況でした。その後、利根川が氾濫し作業をしていた3人は、「助けてくれ」と言いながら、水に流されてしまったのです。皆で3人を探しましたが、残念なことに遺体として見つかりました。

田んぼは広い範囲で浸水し、何日も水が引きませんでした。また、水に流されてきたゴミが多く撤去作業などに時間を要し、1年間はお米が作れませんでした。カスリーン台風については、あんな思いは二度としたくない非常に怖い記憶として残っています。この体験を後世に伝え、残していくために柏市と一緒に努力しています。若い人たちに水害の恐ろしさを分かってもらいたいです。

当時のお住まい（東京都葛飾区） Fさん

私が最初に目にした異常現象は江戸川が干上がったことです。当時は情報も乏しく、上流の堤防が決壊したらしいと聞いても、まさかここまで水が襲ってくるとは思いませんでした。ところがその夕方、今の水元公園近くを流れる大場川の桜土手（桜堤）が切れたと聞き、1人で見に行きました。大変な濁流が町に溢れ出しているのを見て飛んで帰り、荷物をまとめ、命からがら家族で江戸川土手に避難しました。家の周り中から低い所へと絶え間なく流れ込む水音が迫り、本当に怖かった。あの音は今も忘れられません。

当時は私も若く好奇心旺盛だったので決壊現場まで見に行ったりしましたが、油断は禁物。今は情報が届く時代なので、台風の場合しっかり状況を把握すれば十分に備える時間はあります。自然災害は誰も経験したことのない「まさか」が起こるということを常に忘れないでほしいですね。

当時のお住まい（埼玉県北埼玉郡東村〈現：加須市〉） Gさん

当時、私は小学6年生、埼玉県東村新川通に住んでいました。農業組合の組合長だった祖父が、町内の代表者らと利根川の様子を見に行き、帰るなり言いました。「もう駄目だ！水が堤防を超えた、船を下ろす」。我が家の納屋の軒下には長さ3間幅4尺の船が括りつけられておりずっと不思議でしたが、それはこの地が度々水害に襲われてきたため、代々受け継がれたものだったのです。祖父の号令で、私たちは迅速に準備し、隣近所で助け合い、利根川土手へ無事避難。すっかり水が引き自宅に戻ることができたのは、2か月以上後でした。

川は暮らしのすぐ近くにあり、普段は親しみ深い存在なのに、こんなにも恐ろしく変化すること、あの日以来忘れたことはありません。人の力の及ばぬ、思いがけない水害が起こるという、水の恐ろしさを後世に伝えていきたいと思います。